The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	學書三昧
Author(s)	武内, 義雄
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 149-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

又た沿岸の蕃族は馬來諸島のものゝ仲間であるらしく、これ等は多分は漢民族の西北方から入り込む前にゐたらしく、雕題とか黑齒とかいふ樣な熱帶蕃族の風俗を以つて區別して先秦の文獻に見えてゐる。

以上に述べた所は甚だ不十分であるが、要するに秦漢の郡縣を置いた頃には江南の揚子江流域の諸平地は餘程開發されてゐたことが知れる。然れどもその文化が傳播しても山間の僻地はその後今日までも蕃族が殘つてゐる。今も四川雲南には土司なるものがゐるのは、蕃人の酋長をして蕃人を統御させるといふ方針に出てゐる。

學書三昧

武內義雄

人は自己の職業に精進しなければならぬことはいふまでもないが又同時にその職業から解脫して遊戲する境地もなくてはならぬ。これなき人は實に氣の毒千万なもので筆者も正にその一人である。音樂は解らず運動は嫌ひ、まして圍碁や骨牌には尙更ら興味を覺ゑぬ、さりとて書畫骨董をいぢる樣な

餘裕はない、たゞ讀書にあいたときは肱を枕に晝寢する位が關の山である。偶然の思ひつきで字でも習つて見ようかといふ氣分になつて、先生に字はいかにして習ふべきかを尋ねた。先生は弘法大師の「書訣」を讀んで智永の「千字文」を習ふがよいと敎へて下さつた。早速敎へられた本屋に行つて「書訣」と「千字本」とを購ひ求めた、さうしてその後讀書に厭いた時、無聊に苦しむときいつもこれを習ふ樣になつた。有体に白狀するが筆者は生來惡筆で、その上餘り努力しないのだから字は上達しないが、そこはかとなく古人の筆跡を臨書することは樂しみなものである。もし筆者に名利を離れ愛憎を離れ現在から超越して無我の境地に遊ぶ時があるとしたならばそれは字を習ふ時である。私はこの心持ちを學書三昧と呼びたい、さうして多くの人々にもこの三昧に遊ぶことを御すゝめしたい。

とはいふものゝ自分は書家でもなければ書論に通曉してゐる譯でもない。もし人から字のことをきかれたなら、自分が先生から敎はつた通り弘法大師の筆法で智永の千字文を習ふがよからうと受賣りするより外に道を知らない。大師の「書訣」は可なり讀み難い文章であるがそれには古人の註釋もついてゐるから今更ら私の說明を要する點はなからう。秋はたゞ智永の千字文及びそれに關係する法書のことについて一言して見よう、もし同好の士に參考になることがあれば望外の幸ひである。

智永は有名な王羲之の七世の孫で家を捨てゝ僧となり、吳興の永欣寺に住したが、永い間羲之の字を習つてその妙を得、千字文八百部を書いて江東の名刹に納めたと言はれてゐる。現今智永の千字文

と稱するものは此八百部の一が長安の崔氏の家に保存せられてゐたのによつて宋の大觀年中に石に刻したものだといふが、多くは飜刻に飜刻を重ねたものでその神采を失つてゐる。然るに幸ひわが國には智永の眞跡と稱せられる一本が存在して先年京都の山田聖華房といふ本屋で影印本が出來てゐる。この影印本の原本は曾て京都の書家として知られた江馬天江翁の家にあつたが後に谷如意といふ書家の有に歸し、今は大阪の小川爲二郎氏の所有と成つてゐる。私は未だその原本を見たことはないが影印本から推察すると原本の最初は破損して居り、終りに跋語もないらしいからそれが智永の千字文であるか否やは疑はれぬでもないが、その文字の配置から字形の一點一畫まで石刻の智永千字文と一致するより見れば、これを智永と斷定することは當を得たものであらう、但それが果して智永の眞跡か或ひは唐人が智永を双鈎に取つて墨を塡めたものであるかについては學者の間に異論があるが何れにしても石刻本よりは非常に優れたものである。

董廣川の書跋によると梁の武帝が殷鐵石といふ人に命じて王羲之の遺墨中から一千字を拾ひ出し一字毎に別の紙にかき、これを周興詞に命じて完全な韻文に排列せしめたが千字文の起りで、智永の千字文も亦梁の武帝が集めしめた王羲之の字を臨模したものだといつてゐる。試みに王羲之蘭亭帖の中から楷体に近い字を拾つて千字文の眞書と比較すると、その間架筆意ともに相通する所がある。たゞ千字文は蘭亭よりは生采はあるが變化が乏しい、これは恐らく智永が字形を畫一しようとつとめたた

めであらう。又往年上海の有正書局で影印された李懷琳の絕交書といふものがあつて竇氏の述書賦によると懷琳はよく王書を僞作したといはれてゐるが、絕交書の筆意は尤もよく千字文の草書に似てゐる。之等の點から考へると智永の千字文が王書を臨模したものだといふ董廣川の說も根據あるものといはなければならぬ。從つて智永によつて王羲之に入る門徑とすることが可能きる。

王羲之は古今第一の能書家と稱せられてゐるが其眞跡に最も近いものはわが國に傳はつてゐる「喪亂帖」と「九月十七日帖」との二つで、前者は祕府の尊藏にかゝり後者は故岡田正之博士の舊藏で今前田侯爵家の有に歸したものである。これ等は皆唐代の摹寫にかゝるものであるが、その他のものは多く翻刻に翻刻を重ねた拓本ばかりで如何程まで信用してよいか判りかねる。そこで王羲之の書を學ばうとすれば先づこの智永千字文によつて筆意を會得し更に種々の石拓本を參考して、その變化と氣韵とを會得すべきであらう。

羲之の筆跡中尤も著名なものは蘭亭帖である、しかし蘭亭帖は後に唐の太宗の所有に歸して太宗はその死に臨みこれを同葬するやうに遺言して遂に昭陵に埋められたといふから、眞跡の傳はる筈はない、今ある蘭亭は皆唐時の書家が臨模した本を重刻に重刻を重ねたもので、羲之の生采があらう筈がない、蘭亭によつて羲之を窺ふことは頗るむづかしいことである。

張彥遠の法書要錄といふ本に唐の太宗が王羲之の書に心醉してその遺墨三千紙をあつめた、これ等

の遺墨は皆一丈二尺の長卷に仕立て紙の綴ぎ合せには「貞觀」の二字を二の印にしてこれを押し紫檀軸に紫羅標織の帶をつけて毎卷の初めにある二三字を取つてその卷子の題號としたといつてゐるがこれ等卷子のうち尤も有名なのが「十七帖」である。いはゆる十七帖はすべて二十一通の手紙を裝訂したものでその卷頭に「十七日先書云々」とあるから名を得たものである。この卷の飜刻は褚遂良の校定本と賀知章の臨本との二系がある後者南唐の頃澄清堂帖に刻入せられ、次いで又宋の淳化閣帖や大觀帖に飜刻せられたもので前者は清初姜西溟の家にあつた唐拓本が著名である。唐拓本は先年上海で石印に上され後又日本人の手に歸して立派な玻璃版も出來てゐて可なり精巧なものであるが我國に傳はつた喪亂帖等と比較すると矢張り神氣が足らぬ心地がする。

羲之の書として今一つ忘れてならないのは三藏聖敎序である。これは唐僧懷仁が聖敎序の文字を羲之の筆跡中から拾ひあつめて碑に刻したもので、行草の體が巧に配合されて一種の趣きを出して居るさうしてこの碑は宋の頃まで餘り尊重せられなかつたため拓本屋の手にいためられることも少なく一々の文字に生氣がある。元朝の書家趙子昂はこの碑の文字の出所が明かでないから信用出來ないといつて排斥しその後の鑑賞家もこれに雷同した人が多いが、それは未だ深く考へないためである。

聖敎序が石に刻かられたのは永徽四年に褚遂良が書丹して長安の慈恩寺雁塔門に嵌め込んだのが最初で、その後十八年咸亨三年に懷仁の聖敎序が建てられて居る。褚遂良は虞世南、歐陽詢、薛少保と

ともに初唐の四傑と稱せられた書家で能書の故を以て太宗に拔擢せられ太宗の顧命をうけて高宗に事へた人であるが、雁塔聖敎の建てられた翌々年永徽六年には潭州に貶謫せられて居る。褚遂良が貶謫に遭つたのは當時高宗が先帝の後宮に仕へた武昭儀の才色に迷ふて皇后の廢立を行はうとして褚遂良、于志寧等に相談があつたとき于志寧はたゞ默々として一言も發せなかつたが褚遂良は死を以てその非を爭つたため、武后の怒りにふれて潭州に流されたのである。

さうして懷仁の聖敎序は褚遂良貶謫の後十數年して建てられて居りその碑の末尾に于志寧等が潤色した般若心經が附刻されてゐる點などを思ひ合すと、この碑の刻立された動機を忖度することができる。恐らく褚遂良の直言を胸にもつた彼を潭州に貶謫しただけでは滿足が出來ず、彼の書に對する名聲をも奪ひ去らうと考へるに至つたであらう。さうして其目的を達するためには雁塔聖敎以上の名筆を出さなければならない。雁塔聖敎以上の名筆を出すには王羲之をかりるより外に方法がない。乃て武后は懷仁に命じて王書を集めてこの碑に上石せしめたのであらう。果してさうであつたとすればこの聖敎序の中に集められた王書は武后によつて供給せられたものである、太宗が輯めた王羲之の眞跡三千紙中から拾ひ集めたものと想像せられその出所は頗る明瞭なものとなる。現に懷仁の聖敎序中において楷行の体に近い字は定武蘭亭に酷似したものが多い。これ等は恐らく蘭亭帖の唐搨本から拾ひあつめたものであらう。又その中の行草に近い字はわが國に傳はつた喪亂帖や九月十七日帖と神氣の相通

ずるところがある。これ等の點から判斷すると懷仁の集めた王書は確乎たる根據のあるもので趙子昂がいつた如く曖昧なものでない。さうしてそれが宋まで拓工の手にならされなかつたことは非常に幸福なことで、宋拓の聖敎序には眞跡を下る一二等の字がある。さうしてこの種宋拓本も今は精巧な玻璃版によつて複製せられ何人も容易に手に入れることが可能る。

要するに昔から書といへば先づ第一に王羲之を數へるが、王羲之を學ぶにはその門徑を得なければならぬ、その門徑は人々によつて見る所を異にするが先づ智永や喪亂帖等で筆意を學んで聖敎序や十七帖等で間架を知ることがよいであらう。然しこれは素人の書論で勿論大家の前に言ふべきことではない。

唐の太宗が王羲之に心折してその筆蹟をあつめたことは略上に述べた通りであるが、唐の張懷瓘の二王書錄には更に詳細にその事情をのべて次の如くいつてゐる。

貞觀十三年勅して右軍書を購求せしめ並に貴價之に酬ふ、四方妙蹟畢く至らざるなし。起居郎褚遂良と校書郎王知敬等とに勅して相ともに參校せしめ典儀王行眞をして之を裝せしむ、右軍の書大凡二千二百九十紙、裝して十三帙一百二十八卷となす。眞書五十紙一帙八卷、本の長短に隨つて度となす、行書二百四十紙四帙四十卷、四尺を度となす、草書二千紙八帙八十卷、一丈二尺を以て度となす。

この數字は實際參校の任に當つた褚遂良の「晉右軍王羲之書目」と一致しないから、どこまで信用し得るかは問題であるが、兎に角唐の太宗が非常な王羲之崇拜者で、その結果朝廷には多くの眞跡が集まつたことは疑はれない。

太宗は單に王書をあつめただけでなく自分もこれを習つて立派な字がかけた人であつた。弇州山人藁に太宗が古帝王龜鑑の語を眞書と草書でかいて二の屏風となして群臣に示したといふが、今はたゞ草書が傳はつて居て、その輕俊流便、宛然として右軍(王羲之)永興(虞世南)の風度があると賞し、又張耒の宛丘集に、太宗の書を評して、その筆精工法度粹美、これを二王帖中に雜ふるも辯ずる能はずと激賞したのを見てもその上手さが想像せられる。

舊唐書の東夷傳によると太宗は新羅王の使者に對して御製の溫湯銘と晉詞碑と晉書とを贈つたとかいて居るが、いはゆる晉書は勅撰書で、溫湯銘と晉詞碑とは太宗が自撰自書した自慢の書であつたといふ。

晉詞碑は今も尙山西太原縣に西晉詞の境內に立て居る。私はかつてこの碑を見んがために晉詞に詣でたことがある。北平から京漢線で石家莊までゆき石家莊から正大鐵道に乘り換て山西太原府につく太原府から西南約一日行程で太原縣に到着する、さうして縣の西方八支里に晉詞がある。顧炎武の金石文字記に

詞は縣甕山の麓にあり、晋水の發源する所、後人此に池を引き亭を結び橋をその上に架し、林水翳然一方の勝となするに足る、その廟山を負うて東面するを晋水の神となし南面するを唐叔の神となす。

といつたのは簡單にその地勢と風致とを說きつくしてゐる。この地は周の初め唐叔虞の封せられた地であるから、古くからこゝに唐叔を詞つたらしく北齊書に旣に晋詞の名が現はれてゐる。さうして唐の高祖が兵を起すにあたつてこの詞に祈願をこめたのであるから太宗は天下統一の後貞觀十九年の末から二十年の初めにかけて山西にゐた際この詞に詣でゝその成効を告げ翌二十一年七月にこの碑を建てたものである。よつて碑の題額には「貞觀二十一年七月」と書ゝれてゐるこの碑は今碑亭で蔽はれてゐるが、もとは風雨にさらされたものと見ゐて碑の下半分は剝蝕して一字を辨せない。しかしその上半分に殘つた文字を熟視するとその形体風韵は羲之そのまゝで、古人が太宗の書を評して二王帖中におくも辯ずるなしといつたのも誠に理由のあることゝ感せざるを得ない。私はこの碑の拓本一枚購ひ歸つたが、これを聖教序に比較するとその過半は聖教序と同じ形の字で聖教序を擴大して更に生氣を加へたやうに感じた。なほこの碑の裏には當時太宗に隨從した唐初名臣の名が自署彫刻されてゐる、又この碑の左に宋の時重刻された碑があつてその剝蝕の文字も補はれてゐるがその氣韵は風馬牛も相及ばぬ。本碑の高さは一丈二尺二寸八分幅四尺九寸四分表面二十八行、每行四十四乃至五十字を收め

てゐる。この碑によつて太宗が如何に羲之をよく學んだかを證すると同時に羲之の書を髣髴する一資料を加へたものといひ得るであらう。

温湯銘は趙明誠の金石錄卷四には「唐温泉銘、太宗御製並行書」と記載されて居るものが即ちそれであらう。温泉と温湯とは同じ意味である。しかしいはゆる温泉銘が如何なるものであつたかは最近まで明瞭でなかつたが、先年敦煌縣から發現した古鈔本中に偶然その拓本の一部分があらはれた。その拓本は四十八行の剪裝本で毎行六七字から成つて居り初めの部分が破損してゐて標題も筆者も明かでないが、その最後の十七行の銘の部分は絳州帖に刻入されて大宗の秀岳銘と呼ばれてゐるものである。これを秀岳銘と呼んだのは銘の初めが「巖々秀岳、横基渭濱」といふ句で起つてゐるからで深い根據はない、さうしてその銘文の中に「滔々靈水…蠲痾蕩瘵」といひ「偉哉靈穴、凝溫鏡徹」といふ等それが温泉銘であることは自ら推測せられるが、更にその序の部分に「遡二調風一以蕩レ志、鑑二靈泉一而肅レ心」といひ、又「炎景鑠時、長波不レ足二其熱一、霜風繫歲、疊浪不レ稍二其寒一、不下以二今古一變上レ質、不下以二涼暑一易上レ摻」といふが如き皆この拓本が温泉銘たることを示してゐる。さうしてその中に自稱して「朕」といつてゐるのはその作者の天子である證據で「世」の字「民」の字ともに欠筆して居らぬのは（支那では天子の諱は遠慮して完全にかゝずに一畫を略しておくを禮とする、世民は唐太宗の諱であるから他人がかけば世民の字は欠筆する筈である）これが太宗によつてかゝれた證據である。そこで

この拓本は最初の部分がかけてゐて標題を失つてはゐるが、それは太宗自筆の温泉銘たることは分毫も疑ひを容れぬ。この本の原本は佛國の伯希和博士によつて佛國に持ち去られ今パリーの國民圖書館に存するが、かつて羅振玉氏によつて影印せられ後又上海の文明書局から複印本が出てゐるから何人も容易に手に入れることが可能きる。

さて影印本の温泉銘を晋詞碑に對照すると晋詞碑は書体は整頓してゐるが轉折鋒顯がやゝ鈍く感ずる之に反して温泉銘は奔放を極めてゐて鋒顯猶新にして字は少し細く鋭い。朱竹垞のいふ所によると晋詞碑はもと刻が淺くて字も細くあつたが後に庸工が字を浚へて深くした爲め骨力が失せたといつてゐるが、これを温泉銘に對照することによつて朱竹垞の言が當つてゐることを覺える。從つて晋詞碑に失はれた骨力は温泉銘で補つて視るべきで、かく考へて太宗の書を見ると彼は王羲之の形貌をよく學んだことを首肯すると同時に又天性非常な腕を持つた人だと考へざるを得ない。彼は唐創業の英主で躬ら甲冑を衣て軍陣に出入した人であるが、その書においても不世出の天才で虞世南褚遂良にまさるとも劣ることなき力をもつた人だと思はれる。眞に彼は文武の能を兼ね備へた人で、文武皇帝と謚されたのも偶然でない。

昔から王羲之の書を評して鳳翥鸞翔といふが太宗の温泉銘は殊にこの評に的中するやうに思はれる日本の弘法大師や道風にもこの趣きが存するが太宗において特に顯著である。乃で羲之を學ぶには太

宗の書も參考する必要がある。

書は姓名を記すに足ると豪語した古人もあるが成らうことなら書はうまく書きたいものである。然し幼少の頃からペンや鉛筆を使び習された吾々は、到庭古人のやうに筆は使ひこなせぬ、よし及ばないにしても古人の風韻を學んで暫らく現世を離脱することができればこれもまた一つの樂みであらう。

義公水戸光圀卿

江崎政忠

私は青年時代から史學に深い趣味を持ち、それに關する書籍や、人物の傳紀などを愛讀し、老年の今日も猶且つ暇さへあれば、この著作に讀み耽つてをります。つくづくと思ひますに、我が皇室におかせられては、御歴代いづれも叡明にわたらせられたことは、申す迄もございませんが、その間また此の明君を輔け、皇室の御爲め、我國のため、國民のため、盡瘁された——國家に功勞のあつた賢相名臣は、決して少なくはありませんが、しかし我國三千年の歴史を通じて、古今に優越したる一大人格者——いづれの點から見ても、少しも缺點を見出だせない大人格者は誰であるかと問はれましたら、